様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６４３
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２３２６

研究課題名（和文）19世紀の英文学における天上のヴィーナスのイメージ形成とその変容

研究課題名（英文）The image of the Uranian Venus and its (trans-)formation in nineteenth century British Literature

研究代表者
木谷　厳（KITANI, Itsuki）

帝京大学・教育学部・教授

研究者番号：３０６３９５７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、継続的に研究を進めてきたイギリス・ロマン派詩人シェリーの「感性の詩学」（Poetic of Sensibility）を基礎とし、シェリーの時代以降およそ1910 年頃までの英文学において、「天上のヴィーナス（Venus Urania）」のイメージ（形象）がどのように形成されまた変容してきたか、便宜上「新ロマン主義」と呼ばれる詩人作家との比較にもとづくその文学的系譜を辿ることでその感性的な類似性や差異を探った。とりわけ、後世の英詩の「モダニティ」を巡る言説の系譜のなかでシェリーの詩学を考察することをつうじて、この詩人のモダニティの特質が理想主義と懐疑主義の相克にあることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の主たる学術的成果は以下の通りである。第一に、シェリーによる「天上のヴィーナス」のイメージが後世の詩人・作家トマス・ハーディに影響を与え、さらにそこから「近代」をめぐる課題が浮上することを示した。続いて、これに関連して、アメリカの文学理論家ポール・ド・マンによるロマン主義とモダニティ論の研究を進め、『ロマン主義と現代批評（Romanticism and Contemporary Criticism）』の訳者の一人として翻訳書を刊行した 3)。最後に、イギリス・ロマン派詩研究の泰斗、齋藤勇による未発表ノートの研究を通じて、シェリーの詩学における理想主義と懐疑主義の相克をより顕在化させた。

研究成果の概要（英文）：This research project, originally developed from my Ph.D. thesis about P. B. Shelley's poetics of sensibility, explored how the figure of Venus Urania (the celestial Venus) had been created and transformed from the age of Shelley to the beginning of the twentieth century in the history of English literature. My research compared Shelley's imagery of Venus Urania to some similar figures conceived by those poets and writers who could be tentatively labelled "the Neo-Romantics" ranging from the Romantics, the pre-Raphaelites, and the Aesthetes, to the Georgian poets, which revealed certain traits of Shelley's modernity in his poetics--a perpetual oscillation between hope and despair, or, in other words, idealism and scepticism.

研究分野：英文学

キーワード：P. B. シェリー　イギリス・ロマン主義　英詩　天上のヴィーナス　モダニティ　ポール・ド・マン

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2011 年に博士論文を提出して以来、イギリス・ロマン派詩人 P・B・シェリーの「感性の詩学（Poetics of Sensibility)」を源流とした 19 世紀（1815 年-1875 年）の唯美主義の伝統とその系譜を探究してきた。具体的な研究方法としては、シェリーの感性的な美の詩学を、19 世紀後半にウォルター・ペイターらによって確立された「唯美主義（Aestheticism)」の源流の一つと仮定し、1815-75 年と期間を限定しつつ、シェリーの詩群を精読することをつうじて、シェリーの詩学から 19 世紀唯美主義に至る系譜（類似性や差異）を探った。そのなかで、「美的＝感性的なもの（美感的なもの)」や「形式」をめぐる最新の批評動向をシェリー研究に導入することで、唯美主義者的なシェリーの新たな一面を提示することも目指してきた。

２．研究の目的

本研究には、おもに 2 つの目的があった。第一に、継続してきたテーマでもあるシェリーの「感性の詩学」と唯美主義の系譜学的研究を掘り下げること、つづいて、申請者が将来の課題としている、ヴィクトリア朝後期からジョージ王朝時代にかけて起こった、便宜上「新ロマン主義」（Neo Romanticism）と呼ばれる文芸運動（W・モリス、イェイツ、ハーディ、ハウスマン、戦争詩人たちの一部など）以後の詩とロマン派との感性的な繋がりを考察するための基盤づくりである。そのためには、ロマン主義⇒唯美主義⇒新ロマン主義を順に辿って調査する必要があった。この文脈において、古代ギリシアのプラトン主義にもみられる天上的（精神的）な美のシンボルとしての「天上のヴィーナス」という形象が、いかにしてシェリー⇒E・A・ポー⇒D・G・ロセッティ⇒ウォルター・ペイター⇒トマス・ハーディ⇒ロバート・グレイヴズなどの詩人・作家たちに受け継がれ、その変容が英文学に内在するイングランド性とどのような結びつきをもっていたのかを探求することを目指した。

「天上のヴィーナス」というおもに古代ギリシア・ローマ文化に由来する形象を英文学研究にあえて用いる理由としては、19 世紀後半は、神話学や宗教学、文化人類学などの学問が徐々に体系化された時代でもある（英国の例としてはフレイザーの『金枝篇』など)。この文脈において、天上のヴィーナスの形象は異なるヴィーナス表象とも比較対象になるうえに、性別すら超えた第三の性（Uranian）というセクシュアリティの領域にまでその射程を広げることが可能である。また、19 世紀における天上のヴィーナスという形象を探求する過程において、地上のヴィーナスの形象にも目を向けることで、そこから将来的に、ギリシア・ローマ文明以前の、異なる起源を持つ先史的なイングランド性（たとえばストーン・ヘンジと太陽信仰など）を意識した自己表象ならびにそれと不可分なモダニティの概念を照らし出すことも可能になるなど、19 世紀のこうしたヴィーナス表象を問うことには大きな意義があると予測された。このような比較的長いスパンのなかにシェリーという詩人をあらためて置くことをつうじて、「天上のヴィーナス」の表象を通じてみたその詩学の特徴を、19 世紀イギリスにおける文学的モダニティ、とりわけその理想主義と懐疑主義の相克の問題という観点から捉え直すことで新たに定義することを目指した。

３．研究の方法

かつて高橋康成は、シェリーの観念性とエロティシズムを連結させて「観念的エロス」と名付けたが、これは、おそらくスーザン・ソンタグ（Susan Sontag）が「反解釈（Against Interpretation)」(1964）で述べた「芸術の官能美学（erotics of art)」から着想を得たものと予想される。知性からの感性の奪還という意味における、ソンタグによる「観念のエロス」の再評価は、いまだにシェリー研究において豊かな可能性を秘めているが、高橋らが言及しつつも、その後研究が進展したとは言いがたいこの概念を、本研究計画指導のための助走として、まずはシェリーの「感性の詩学」という文脈において捉えなおし、精神的または身体感覚的な「距離感」のダイナミズムとともに考察した。その例として、晩年のシェリーによる一連の恋愛詩篇、通称「ジェイン詩篇」を取り上げた。この詩篇では、シェリーとジェインの心理的な距離と身体的な距離が絶妙に絡み合う様子を表現する、遥かなものやうつろいゆくものの比喩が、いずれも天上の愛（聖愛）と地上の愛（俗愛）のあいだに存在するものとして描かれている点に着目し、そこで生み出される精神的または身体感覚的な距離感のダイナミズムが、天上のヴィーナスという美の形象を通じて可視化されていることを示した。こうしてジェイン詩篇という小さな作品群から露わになる晩年のシェリーの叙情性を新たに捉えなおすことで、同じく天上のヴィーナスとしての美の形象が、後世の詩人たち、たとえばE・A・ポー詩論やD・G・ロセッティによる審

美的な詩のなかに登場するヴィーナスの形象へとつながる具体的な道筋を明らかにすることができた。これを踏まえることで、新ロマン主義時代までにヴィーナスの系譜がどのように継承されつつ変容したかについて探求し、本計画の研究期間において、おもにシェリーとハーディの関係について掘り下げることができた。

また、上記のアプローチの理論的支柱として、本計画の理論的基盤の一部を構成する「ロマン主義のモダニティ」の概念に関する研究も本格的に開始した。シェリーをはじめとするロマン主義の詩における現代性（モダニティ）に対する意識と、天上のヴィーナスの表象や知性的エロティシズムの概念をどのように関連づけることが可能かという点を研究するための基礎構築を進めた。その際、アメリカの文学理論家ポール・ド・マン（Paul de Man）によるロマン主義とモダニティ論の研究を参照した。ド・マンによる論考をもとに、いわゆる文学史的な解説のようにロマン主義とモダニズムを対局に置くのではなく、ロマン主義をモダニズムの源流とみなし、ロマン主義とモダニズムを架橋するポストロマン主義という軸とともにモダニティの問題を考察することを試みた。

４．研究成果

本研究の主たる学術的成果は以下の通りである。

1) 第一に、シェリーによる「天上のヴィーナス」のイメージが後世の詩人・作家トマス・ハーディに影響を与え、さらにそこから「近代」をめぐる課題が浮上する過程について、『ダーバヴィル家のテス（*Tess of the D'Urbervilles*）』（1891）の精読を基に示した。

2) 1) に関連して、アメリカの文学理論家ポール・ド・マンによるロマン主義とモダニティ論の研究を進め、『ロマン主義と現代批評（*Romanticism and Contemporary Criticism*）』の訳者の一人として翻訳書を刊行した。

3) 2)に関連して、ロマン主義とモダニズムを架橋するポストロマン主義という軸とともにモダニティの問題を考えたド・マンによる上記の論考を理論的背景とし、ロマン主義とモダニズムを対局に置くのではなく、ロマン主義をあえてモダニズムの源流とみなすことで、シェリーの「メドゥーサについて（On Medusa）」（1819）という詩とウィルフレッド・オーウェンの戦争詩「ナント美シク相応シイコトカ（*Dulce et Decorum est*）」（1920）を「死のエクフラシス」として比較的に論じた。そして、戦火における死の苦しみと恐怖を、克明に、また憐憫とともに描きながらも、それを詩によって美的に解消するような自己欺瞞の誘惑の葛藤とも戦っていたオーウェンを、憐憫の戦争詩をつうじて（シェリー的な）ロマン主義のモダニティの本質――美的な全体化への誘惑とその断念をめぐる葛藤――に接近した詩人として新たに提示した。

4) イギリス・ロマン派詩研究の泰斗、齋藤勇による未発表ノートの研究を通じて、シェリーの詩学における理想主義と懐疑主義の相克をより顕在化させた。

5) シェリーの詩学における「天上のヴィーナス」と密接にかかわる哀歌『アドネイアス（*Adonais*）』（1821）を取り上げ、詩人キーツと目される青年アドネイアス（アドナイース）の死を嘆く女神ユーレイニア（ウーラニアー）の表象をめぐり、シェリーが、先行する詩人スペンサーやミルトンらによるユーレイニアのイメージに影響を受けつつも――この考察の着想についてはE. R. クルティウスによる詩神（the Muses）のトポスをめぐる記述から示唆を得た――、その描写や役割を、当時のより「科学的」、あるいはむしろ「学知（science）」的な時代精神に即して変容させており、また、同様の意識が同時期に書かれた『詩の擁護（*A Defence of Poetry*）』（1821）における詩の神性（divinity）をめぐる議論にも反映されていた点を新たに論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 木谷 厳	４．巻 10
２．論文標題 理想への「歎き」と「ねがい」――齋藤勇のShelley講義ノートに見られる後年の文学論の萌芽とその差異―― ３．雑誌名 明星大学明星教育センター研究紀要	５．発行年 2020年 ６．最初と最後の頁 23 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 木谷 厳
２．発表標題 「求めて得ざる歎き」から「星を求める蛾のねがい」へ――Shelley講義ノートに見られる齋藤文学論の萌芽
３．学会等名 日本英文学会関東支部会第17回（2019年夏季大会）、シンポジウム「紹介から研究へ――若き齋藤勇の英詩講義ノート（新発見！）を読む」
４．発表年 2019年

１．発表者名 木谷　厳
２．発表標題 「ShelleyとOwenをつなぐモダニティ――死のエクフラシスと断片化」（シンポジウム「100 年目の Wilfred Owen」）
３．学会等名 日本英文学会（第90回大会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 木谷 厳
２．発表標題 メアリ・シェリー「私が選んだもの（"The Choice"）」の叙情性――『アドネイアス（_Adonais_）』との比較を中心に
３．学会等名 日本シェリー研究センター第31回大会 シェリー没後二百周年記念シンポージアム 「『ここに私を生かし、死なせたまえ』――シェリー夫妻とイタリア」
４．発表年 2022年

１．発表者名 木谷 厳
２．発表標題 神学から詩学へ――Shelleyの_Adonais_におけるUraniaと「詩の擁護」
３．学会等名 第94回日本英文学会全国大会シンポージアム「サイエンスと詩の弁明」
４．発表年 2022年

１．発表者名 木谷 厳
２．発表標題 レスポンス：シェリーの〈恐怖の年〉と〈驚異の年〉――「西風に寄せるオード」における死と再生
３．学会等名 シンポージアム「シェリーの「驚異の年」再考――メアリとともに織りなす生（lives）と言の葉（leaves）」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 秋山 嘉（編著）、木谷 厳	４．発行年 2021年
２．出版社 中央大学出版部	５．総ページ数 290
３．書名 近代を編む（第8章 木谷 厳「『ダーバヴィル家のテス』における「近代の痛み」と（ポスト）ロマン主義――シェリー的な愛を導きの糸として」を担当）	

１．著者名 ポール・ド・マン（中山 徹、鈴木 英明、木谷 厳 訳）	４．発行年 2019年
２．出版社 彩流社2019	５．総ページ数 407
３．書名 ロマン主義と現代批評――ガウスセミナーとその他の論稿	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
日本シェリー研究センターの第31回大会（マーク・サンディ教授特別講演「‘Dim Mirrors of Ruin’: The Myth, Memory, and Mourning of P. B. Shelley’s Death」）	2022年～2022年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関